



北村 明也

―師走の感動が日本中に広がり改めて「原爆許すまじ」を再確認しました。

「その波は世界中に覚醒を促したといっても過言ではないと思います。ノーベル平和賞を受賞した日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)の代表委員・田中熙巳さんが10日の授賞式で『人類が核兵器で自滅することのないように』と訴えた演説は未来永劫の規範となるように願っています」

―同感です。日本は世界で唯一の原子爆弾の惨禍を受けた国ですから。『八月は六日九日 十五日』という作者不詳の句があります。が「ヒロシマ ナガサキ」はぜひ、次代へ次々代へ不戦の誓いと共に伝えたいですね。

◇
―平和を願う、祈る句といえは俳誌『りんどう』主催の藤岡筑邨先生に次のような秀句があるんです。

ヒロシマや血のかたまりの冬
薔薇
被爆ドーム暮れ怨念の虎落笛
寒々とヒロシマあり広島と別に
冒頭の句の前に筑邨先生は次のように述べています。

戦後三十数年、はじめて

藤岡筑邨先生と「ヒロシマ」余話

広島を訪れ、原爆ドームなどをまのあたりにして、いまさらながら原爆のおそろしさを実感する。

「筑邨先生には多くの句集や著書がありますが、ヒロシマの句が載っているのは？」

―1982年9月発刊の『句集 蟻ヶ崎』です。先生にとつて『蒼滴集』『姥捨』『城ある町』につぐ第4句集です。ちょっと一区切りをどの思いもあつたのではないのでしょうか。この年の3月、長い教職を辞し「創作を書いたり、俳句を作ったりの生活をするにしました。そんなこともあって、この集を出すことにした」(あとがき)とあります。書名は当時住んでいた町の名からです。

◇
「筑邨先生は現在、東京にお住まいですが101歳。今も俳誌『りんどう』を主宰。同誌は1946年5月創刊ですから人間なら78歳。現在、松本を中心に多くの俳句結社があり、活発な創作活動が繰り広げられています。筑邨先生と『りんどう』は敗戦の翌年にスタートしています。戦後の文芸復興に大きな役割、貢献を果たした功績は実に大きいと思います」

―松本平に豊かな俳句の土壌をつくったというわけですね。

「副主席の降旗牛朗さんが先生を扶けて、その土壌をさらに豊かに活動中なのは頼もしい限りです」

石垣の石のちからの冬の城

筑邨

(きたむら・としや、エッセイ
スト―松本市)